

## 福島先生と教育研究全国集会

佐々木 享

福島要一先生についての記憶は、私の場合、日教組の教育研究全国集会（略称、教研全国集会）についての記憶と結びついている。

初めて先生にお目にかかったのが教研集会の分科会であったし、その後も先生にお会いしたのは大い教研集会だったからである。その印象は強烈だった。

第九次の教研全国集会は、六〇年一月二六日から二九日まで、千葉市で開かれた。当時中学校の教師であった私は、この年初めて、教研全国集会の生産技術教育分科会に参加した。『日本の教育 第九集』をみると、「生産技術教育」の執筆者は福島先生である。この記録によると、分科会講師として参加した人はかなり多勢だった如くであるけれども、私には、福島先生、清原道寿先生、桐原葆見先生以外の記憶は判然としない。他の人は多分、都道府県教組の講師として参加しておられたのであろう。いずれにせよ、この分科会運営にあたっての福島先生のたづなさばきはあざやかであった。

当時、この分科会の正会員（のちのレポート提出者）の大部分は、中学校の職業・家庭科（家庭科のためには別に分科会があったから、実際はすべて職業科）の教師であり、私もその一人で

あった。ところで、中学校学習指導要領は一九五八年一〇月に全面改訂され、職業・家庭科は、従来の図画・工作科の中の工作の部分を取り出して、技術・家庭科とされた（ありていにいえば、職業科が技術科となったのだ）。職業・家庭から技術・家庭への移行は六〇年度から開始され、六二年度から全学年で全面实施となった。六〇年一月に開かれた第九次の集会は、移行措置に入る直前だったわけである。

しかし、この移行には、他の教科とは違って複雑に問題がからんでいた。職業・家庭には他教科より変化が多く、一九五七年に改訂『学習指導要領』が刊行されたばかりであったから、また振りまわされるのかというおもいがあった。こんどは、教科（名）まで違った。したがって免許状も、講習会の受講を条件に、新たに技術科の二級免許状が交付されることになった。何よりも、農業が主流だった内容を木工加工、金属加工、機械、電気等の工的内容に全面的に変えたことが重要な変化だった。施設設備の整備もされないままの移行だから、現場教師の間には、不満と不安が充満していた。理論的には男子に技術科、女子には家庭科という差別を制度化したことが最大の問題であった筈なのに、そういう問題を吹き飛ばしてしまう程に、不満と不安は大きかったといえる。日教組の教研全国集会の生産技術教育分科会には、この不満と不安がむき出しにぶつけられた。

『日本の教育 第九集』の「生産技術教育」の冒頭で福島先生は、「第八次の教研集会（一九五九年一月）で、この第六分科会はずっと大きく動揺し、みよりの少ないものに止まった」と書いている。これによると、前年の集会は、よほどひどかったものとおもわれる。福島先生は続

けて、「第九次は、……昨年無比し格段にみのりの多いものになった」と書いている（一三四頁）。いま読みかえしてみて、福島先生は随分がまん強い、また暖かい人だったのだと、つくづくおもう。というのは、前年の様子を知らない私には、この第九次の生産技術教育分科会の様相は混乱の極にあったようにおもえたからである。とくに分科会の後半では、正会員が総立ちになって司会者席につめよるような場面が何回となくあり、やむを得ず、正会員の私も討論整理のために発言する機会が何回あった。そんなとき、結局は福島先生の澄んだ声でようやく討論が整理される場面も少なくなかったからである。当時の私は、福島先生は『米』（山波新書）の著書のある農業の専門家らしいというおぼろげな理解しかもっていなかったのだけれども、現場の窮状を知りながらも、しかし工業技術を中心とした技術教育をきちんと展望できる先生であることを初めて知った。このことは、第九次から第一四次までのこの集会での福島先生の言動を通して、次第に私の確信のようなものになって行った。ところで、この第九次集会の終了直後、私の学校に福島先生から一枚の端書がきた。「教研集会への参加ご苦労でした。君がきてくれてお助かりでした」という意味のことが大きな字で書かれていた。きめ細かな配慮をする方だった。この端書を私はつい最近、残念なことに失ってしまった。

その後も福島先生は、他の助言者は入れ替わることが多かったのに、第一四次の福岡集会まで一貫して、この生産技術教育の分科会の講師をつとめられた。私は、勤め先の学校のつごうで欠席した第一二次集会（福井）をのぞいて、毎年のようにこの分科会に司会者あるいは正会員として参加したので、いつも、福島先生が指導・助言される姿を見てきた。考えてみれば、職業科か

ら技術科へ移行するというこの分科会が直面した最も困難な時期に福島先生は一貫してこの分科会を指導されたわけである。

先生は、どちらかといえば、現場教師の発言をじっと聞くという方針であられたようにおもふ。しかし、筋の通らない発言を見過ごしてしまうことはなかった。たしか六三年一月の第一二次集会（鹿児島）の折だったと記憶するあるシーンは忘れられない。（余分なことだが、この年の鹿児島は八五年ぶりとかの大雪だった。）現場教師の気分にあった内容には違いないけれども、たて続けにやや筋の通らない発言が続く場面があった。司会者の私が困惑していると、福島先生はやおら立ち上がり、演壇の前へ進み出て、腕を後ろにして司会者の机に手をついた姿勢で、「君たちはそういうが……」とじゅんじゅんと半時間程も発言されたことが忘れられない。筋の通らない、いい加減な発言は許されない。教師はもっと子どもたちのために勉強しなくてはならない、というような内容であったとおもう。

六五年四月に専修大学の教員となった私は、第一五次集会（福島）からは、教研全国集会の講師として参加するようになった。はっきりしないけれども、原正敏先生はその少し前からこの分科会の講師として参加していたと記憶する。福島先生は、「もう君たちの時代だから、あとはまかせよう」といわれて他の分科会の講師となられたので、同じ席で一緒にいる機会はなかった。他の分科会というのは、第一五次集会から初めて開設された大学教育分科会である。周知のように、先生は長く学術会議の会員として活躍しておられた。考えようでは、国の文教政策の動向が敏感に反映する大学教育の分科会を担当されたことは適任だったともいえる。しかし現実には、ど

ういうことになるのか皆目わからず、しかもサムライも多いに違いないという難題をかかえた新設分科会を担当されたわけである。その意味で、先生は難しい局面を決して回避したりしない方だった。

福島要一先生は、教研全国集會には、たしか第二回集會（高知）からずっと継続して参加されてきたと聞いている。そしていつも、生産技術教育をはじめとする難題をかかえた分科会や新設の分科会の講師（のち助言者、共同研究者と改称）を担当された。二七年ぶりに高知で開かれた第二九次集會のときには、「宿のおかみが憶えてくれたよ」と嬉しそうに話されていた。

私は、第九、一〇次集會に続き、一九六三年一月の第二二次教育研究全国集會（鹿児島）以降今日に至るまで、連続してこの集會の技術教育分科会に参加してきた。毎年参加できたのは、招かれたからであるけれども、職場の同僚の理解・協力があつたし、私自身も健康に恵まれてきたからこそ継続して参加できたのだとおもっている。それはさておいて、この第九次集會より前のことになる、提出された個々のレポートや『日本の教育』のようにまとめて書かれたものに頼る以外にない。しかし記録は、討論の流れや雰囲気を知るためには限界がある。福島先生には、学術会議の歴史については著書があるけれども、教育研究集會についてのそれはない。この点で、生き証人の福島先生にはじっくりとお話をうかがっておくべきだった。

さいごに、教育研究全国集會における福島要一先生の足跡を毎年の『日本の教育』で調べてみたので、参考のために記しておく。集會名、開催日程、場所、説明の順である。

#### 第一回教育研究大会 一九五一、一一、一〇～一二 日光

『教育評論』の臨時特集号として刊行された「第一回教育研究大会報告書」の分科会の記録は、基本的には速記形式で、巻末の「講師一覧」に福島要一先生の名はない。

#### 第二回全国教育研究大会 一九五三、一、二五～二八 高知

日本教職員組合編『日本の教育 第二回全国教育研究大会報告書』（一九五三年九月三〇日、岩波書店）中の『圃平和と生産のための教育』（四〇七～五〇一頁）を福島要一先生が単独執筆。なお、編者は以下すべて同じなので省略する。

#### 第三回全国教育研究大会 一九五四、一、二五～二八 静岡

『日本の教育 第三集』は分冊形式で刊行され、筆者の手元にある「第八分科会 平和の生産人の育成に直結する教育の具体的展開」を収録した第Ⅷ分冊（一九五四年一〇月五日、国土社）は速記形式に近いもので、巻末の講師氏名中に福島要一先生の名はない。

#### 第四次教育研究全国集會 一九五五、一、三〇～二、二 長野

（以後、集會名はこの形式で定着した）

『日本の教育 第四集』（一九五五年五月一〇日、国土社）中の「第二分科会 生産技術を高めるための教育（職業・家庭科を中心として）」はどのようにすすめるか」（一八七～二三〇頁）

を福島先生が単独執筆。

第五次 一九五六、一、三〇～二六、二 松山

『日本の教育 第五集』（一九五六年五月五日、国土社）中の「第二分科会 生産技術を高めるための教育はどのように進めるか」（一四一～一七六頁）は清原道寿氏が単独執筆。記事の中に講師として本山、長谷川、磯野（富）、磯野（誠）の名は見えるけれども、福島先生の名はない。

第六次 一九五七、二、一～四 金沢

『日本の教育 第六集』（一九五七年一〇月二五日、国土社）中の「第六分科会 生産技術教育」（二二三～二四八頁）を福島先生が単独執筆。

第七次 一九五八、一、二五～二八 別府

『日本の教育 第七集』（一九五八年六月一日、国土社）中の「第六分科会 生産技術教育」（一七三～二〇〇頁）を福島先生が単独執筆。

第八次 一九五九、一、二四～二七 大阪

『日本の教育 第八集』（一九五九年六月一〇日、国土社。これは上下二巻に分けて刊行さ

れたらしいが、筆者の手元にあるのは一巻本）中の「第六分科会 生産技術教育」を福島先生が単独執筆。

第九次 一九六〇、一、二六～二九 千葉

『日本の教育 第九集』（一九六〇年七月一〇日、日本教職員組合）中の「第六分科会 生産技術教育」（一三三～一五六頁）を福島先生が単独執筆。

第一〇次 一九六一、一、二九～二六、二 東京

『日本の教育 第一〇集』（一九六一年五月三一日、日本教職員組合）中の「第六分科会 生産技術教育」（二五五～二七三頁）は、清原道寿氏が単独執筆している。記事中に「福島講師」の名が見えるので、福島先生も参加しておられたことがわかる。なお、この報告書には、「日教組第一〇次・日高教第七次合同教研全国報告書」の副題がつけられている。今次集会から両教組の全国集会が合同したからである。この方式は第三八次まで続いた。

第一一次 一九六二、二、九～二二 福井

『日本の教育 第一一集』（一九六二年七月二〇日、日本教職員組合）中の「第六分科会 生産技術教育」（二二四～二四三頁）を福島先生が単独執筆。

第二次 一九六三、一、二五～二八 鹿児島

『日本の教育 第二集』（一九六三年一月五日、日本教職員組合）中の「第六分科会 生産技術教育」（二三～一五〇頁）を、清原道寿・福島要一両氏が執筆している。二日目午後から中学校・高校の分散会がもたれたので、明記してはいないけれども、福島先生は高校を分担されたものとおもわれる。

第三次 一九六四、一、一五～一八 岡山

『日本の教育 第三集』（一九六四年七月二〇日、日本教職員組合）中の「第八分科会 生産技術教育」（一八三～二〇四頁）を清原・福島両氏が執筆している。分担区分は明記されていない（以下同じ）。

第四次 一九六五、一、一四～一七 福岡

『日本の教育 第四集』（一九六五年八月二〇日、日本教職員組合）中の「第八分科会 技術教育」（二六五～一八五頁）を福島先生が単独執筆している。なお、今次集会から分科会の名称が「技術教育」と変わった。

第五次 一九六六、一、一四～一七 福島

『日本の教育 第五集』（一九六六年七月一五日、日本教職員組合）において、福島先生

は、この年初めて開設された「第一八分科会 大学教育」（三八九～四〇六頁）を単独執筆している。

第六次 一九六七、一、二二～二四 伊勢

『日本の教育 第六集』（一九六七年九月二五日、日本教職員組合）中の「第一八分科会 大学教育」（三八五～四〇一頁）を福島先生が単独執筆している。

第七次 一九六八、一、二七～三〇 新潟

『日本の教育 第七集』（一九六八年六月二五日、一ツ橋書房）中の「第二九分科会 大学教育」（四二一～四二八頁）を福島要一、渡辺洋三の両先生で執筆している。

第八次 一九六九、一、二五～二八 熊本

『日本の教育 第八集』（一九六九年八月五日、一ツ橋書房）中の「第一八分科会 大学教育」（四二七～四五〇頁）を福島先生が単独執筆している。

第九次 一九七〇、二、七～一〇 岐阜

『日本の教育 第九集』（一九七〇年七月一〇日、労働旬報社）中の「第一八分科会 大学教育」は、伊ヶ崎暁生氏が単独執筆している。その中に福島要一先生が参加しておられた旨の

記述が見える(四五四頁)。

第二〇次 一九七一、一、一三〇一六 東京

『日本の教育 第二〇集』(一九七一年六月一五日、日本教職員組合)によると、この年から「第二三分科会 公害と教育」(執筆者は藤岡貞彦氏)が新設された。本文中に、福島要一先生がこの分科会に参加していたことのわかる記述がある。なお、この集会から、従来の「講師」は「助言者」と改称された。

第二一次 一九七二、一、一五〇一八 甲府

『日本の教育 第二一次集』(一九七二年六月一五日、日本教職員組合)には、執筆者中に福島要一先生の名は見えない。「大学教育」「公害と教育」の分科会の記述だけでは、先生が参加しておられたかどうかわからない。なお今次集会から、従来の「正会員」は「レポート提出者」と改称された。

第二二次 一九七三、一、一四〇一七 和歌山

『日本の教育 第二二次集』(一九七三年八月一〇日、日本教職員組合)の執筆者に福島要一先生の名は見えない。

第二三次 一九七四、一、一八〇二一 山形

『日本の教育 第二三次集』(一九七四年八月三〇日、日本教職員組合)の執筆者名に福島要一先生の名は見えない。なおこの集会から、「技術教育分科会」は「技術・職業教育分科会」と改称した。

第二四次 一九七五、一、二四〇二七 岡山

『日本の教育 第二四次集』(一九七五年六月一〇日、一ツ橋書房)

第二五次 一九七六、一、二三〇二六 大津

『日本の教育 第二五次集』(一九七六年六月一〇日、一ツ橋書房)

第二六次 一九七七、一、二八〇三一 埼玉

『日本の教育 第二六次集』(一九七七年五月三一日、一ツ橋書房)

第二七次 一九七八、一、二六〇二九 沖縄

『日本の教育 第二七次集』(一九七八年五月二五日、一ツ橋書房)の「公害と教育」の中の福島助言者(五一〇頁)は、福島要一先生ではなく、福島達夫氏ではなからうか。

第二八次 一九七九、一、二六～二九 水戸

『日本の教育 第二八集』(一九七九年五月二五日、一ツ橋書房)

第二四集から第二八集まで、何ものべなかったのは、執筆者名に福島要一先生の名が見えなかったからである。以下も同じ。

第二九次 一九八〇、一、二五～二八 高知

『日本の教育 第二九集』(一九八〇年五月二四日、一ツ橋書房)中の「公害と教育」の記述(五一頁)中に福島要一先生の名が見えるので、先生が参加していたことがわかる。このとき、先生七二歳。各年の『日本の教育』の記述は、執筆者は当然に参加していたことがわかるけれども、執筆者以外に参加した助言者の氏名は不明であることが多い。

第三〇次 一九八一、一、一三～一六 東京

『日本の教育 第三〇集』(一九八一年五月二九日、一ツ橋書房)

第三一次 一九八二、一、二九～二、一 広島

『日本の教育 第三一集』(一九八二年六月一日、一ツ橋書房)

第三二次 一九八三、一、一〇～一三 盛岡

『日本の教育 第三二集』(一九八三年六月一日、一ツ橋書房)

第三三次 一九八四、二、五～八 神戸

『日本の教育 第三三集』(一九八四年六月一日、一ツ橋書房)

第三四次 一九八五、一、一一～一四 札幌

『日本の教育 第三四集』(一九八五年六月五日、一ツ橋書房)

第三五次 一九八六、一、一九～二二 大阪

『日本の教育 第三五集』(一九八六年六月一〇日、一ツ橋書房)。福島要一先生は執筆者ではないけれども「第二四分科会 環境問題と教育」の記述中に「福島要一助言者」として名が見える(五一頁)ので、参加しておられることがわかる。この時、先生七八歳。

第三六次 一九八七、五、七～一〇 東京

『日本の教育 第三六集』(一九八七年一〇月一〇日、一ツ橋書房)

第三七次 一九八八、一〇、九～一二 東京 / 一〇、二四～二六 札幌

『日本の教育 第三七集』(一九八九年二月三日、一ツ橋書房)。「福島要一助言者」の名

が「公害・環境問題と教育」の中（四二二頁）にみえるので、福島先生が参加していたことがわかる。この参加が最後となった。この時先生八一歳。

第三八次 一九八九、八、八〜一一 盛岡

『日本の教育 第三八集』（一九九〇年、一ツ橋書房）の「第二四分科会 公害・環境問題と教育」には、「出席を予定されていた福島要一助言者は、初夏にアフリカのコートジボアールで開催されたユネスコ主催の平和と環境教育会議に出席して体調をそこなわれ、集会直前に急きょ入院された。この分科会が設けられて以来、はじめて欠席された。そして九月一日に永眠された。……ここにご冥福をお祈りいたします」と丁寧に書かれている（執筆者は福島達夫氏）。

（技術教育研究会代表委員）  
名古屋大学教育学部